柵をまたげば

アラシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
柵をまたげば

【Ｎコード】
Ｎ４０７４Ｄ

【作者名】
アラシ

【あらすじ】
ある日のこと、限定の週刊少年チャンプが発売された。それに新作の漫画『タイムスリップ』と言う話が載っていた。興味を惹かれた三人の主人公たちは……

序章（前書き）

ちなみにこれ、浅田次郎さんの『地下鉄に乗って』とかなり似ています。あらかじめご了承下さい。かいていて気がついたものです。パクリなどではありません。

序章

序章

谷口俊輔は幼稚園に入る前の日、他人の家にあがった。たまたま同じ幼稚園に入る人が近くに住んでいたから、挨拶代わりにということだ。

もう何度かあがっているので、部屋の位置が大体分かっていた俊輔は、久保大樹と二人でかくれんぼをして遊んでいた。

俊輔は隠れるための場所を探している。なかなか見つからずふと入ったのは、俊輔の母たちがいる部屋だった。

「あら、どうしたの？」

母の美智子は俊輔に近寄っていく。

「かくれんぼしてるの」

「そう。鬼？」

「いや」

「この部屋には、隠れられそうなところはないんじゃない？」

俊輔は美智子の言葉は無視して、部屋を見回した。

目に入り込んだのは、一人の男だった。

「ねえお母さん。あの男の人誰？」

俊輔は正面のソファに座っている男を指差して言った。男は俊輔をジロッと睨みつけたが、すぐに新聞に目を戻した。

「あの人はね。この家で一番偉い人なの」

恵美子は俊輔と同じくらいの目線までしゃがみこんだ。

「偉い人？」

「ええ、そうよ。この家の……、なんて言えばいいのかしらね」

恵美子は久保の母親と顔を合わせ、少し笑った。

「うちにはあんな男の人いないよね？」

恵美子は眉を寄せた。

「うちはね。今は私が一番偉い人なの」
「今？　昔は？」
俊輔の鋭い質問に、恵美子はしばらく考え込む。
「うん。俊輔が生まれる前は、私じゃなかったの」
「誰？」
俊輔は恵美子の服を引っ張った。
「あの男の人と、同じような人よ」
俊輔は質問を考えている様子だ。
「何でいなくなっちゃったの？」
恵美子はうーんと唸り、再び考え込んだ。
「どこかへ、行っちゃったの」
「どこか？」
「ええ。どこにいるか分からないくらい遠くのところ」
恵美子は何かを思い出すような仕草を見せた。
「――、帰ってこないの？」
俊輔の問いに、恵美子は黙り込んでしまった。が、すぐに口を開いた。
「いつかは……、いつかは、帰ってくるわ」
部屋はしばらくの沈黙。
「もーいーかい」
沈黙を破ったのは、久保の声だった。
「まーだだよ」
俊輔はそう言って、部屋を出て行った。

それ以来、俊輔は恵美子に何度も同じ質問をしてきたが、その度に同じような答えを返されるだけだった。そして月日は流れ、俊輔は六年生になった。

夢　1〜2

夢

1

「はぁーい。みんな席に座って」
手を叩きながら村田紀子が言うと、今まで騒がしかった教室が急に静かになり、まるで図書館のような雰囲気になる。
「起立！」
村田が号令をかけると生徒は一斉に立ち、
「おはようございます！」
と元気な声が返ってくる……。
村田にとってはこんな感じになるのが理想的なのだが――、現実はかけ離れている。
「みんな、席に座って」
なんて言っても無駄。座るのは何人かの優等生だけ。その優等生たちが他の人たちに声をかけてようやく、だらだらと席に着く。
だか、今日は違った。「席に座って」と言うと、生徒は一斉に席に着いたのだ。
「先生、号令は？」
いつもはマイペースでおっちょこちょいの久保が言っても、村田はしばらく唖然としていた。
何かおかしいわ。と首を傾げつつ、村田は号令をかける。
「起立」
「おはようございます！」
いつもより数倍大きな声が返ってきた。
やはり気にかかった村田は、生徒を見渡しながら言った。
「みんな？　何かあったの？」

「知らないんですか先生？」
やんちゃだが、やるときはやる谷口が偉そうに言った。
「な、何の話？」
「今日は三時から、限定の少年チャンプが発売されるんですよ」
谷口は興奮のあまりか、立ち上がって言った。
「付録のカードもすごいし、新作の漫画、アイシールド１８の最終回と、盛りだくさんなんです」
優等生の一人に入る国見一彦がいった。
なるほど。だからできるだけ行儀よくして早めに事を進ませ、すぐに家に帰る。まあ、チャンプが欲しいというだけのことか。
分からないわけでもないが、いくら行儀よくしても、授業は早く終わることはないし……。
「まあ、中にはそういう物に興味はないって人もいるんですけど、その人たちにも協力してもらっているんです」
国見が付け足した。
こんなことでクラスの団結力が高まっている？　だとしたらなかなかよいのではないか。
「分かったわ。そういうことなら、先生も協力しましょう」
生徒たちはお互いの顔を見合って、うん、と頷くと、
「ありがとうございます！」
と大きな声で言った。
「ただし」
村田は声を落とした。そのせいで生徒たちは何か言われるのではないかと硬くなった。
「勉強はきちんとやるのよ」
思ったよりも優しい言葉に安心した生徒たちは、
「はい！」
と返事をした。
やれやれ。今日は大変そうだ。村田は思わず呟いていた。

2

帰りの会が終わったと思ったら、生徒たちの大半は、嵐のように消えてしまった。
ようやく。と一息つく村田。教室を歩き回り、落し物やゴミをチェックし始めた。
静かになったな。と思った矢先だった。
「さようなら！」
と言う声と共に、バタバタと大きな足音が聞こえたかと思ったら、すぐに消えてなくなった。
もしかして――、と思い、村田は教室を出た。
「あっ！　村田先生」
村田は後ろを向く。
「あ、岸本先生」
隣のクラスの教師の岸本光二だ。さわやか系の若手先生。
「村田先生のクラスも、同じですかね」
「ええ、たぶん」
「チャンプですか」
「そうです」
ああ、やっぱりか。と二人は頭を抱える。
「お互い大変でしたね」
村田は気を取り直して言った。
「ええ。まったくです」
ふふふ。と少し笑ったそのときだった。
「さようなら！」
生徒が一斉に飛び出てきた。
「ふふふ……、ははは」
二人は苦笑した。そしてすぐに、はぁー、とため息をついた。

夢　3～4

3

その頃谷口、久保、国見の三人は、途中の公園で休憩していた。
「さ、さすがにまだ、大丈夫だよな」
国見の言葉で、谷口は公園の時計を見る。
「まだ二時四十分だ。余裕余裕」
久保は水道の水を飲み始めた。
「だけど急いだ方がいいよ。万が一ってこともあるし」
「そ、そうだな」
国見の話に、二人は賛成した。そしてまた走り始めた。

「ただいまー」
谷口は勢いよく家に入り込み、朝、念のために置いていた財布を手に取る。
「あら、もう行くの？」
母さんの声がした。朝言っただろう！　という気持ちを抑え、
「うん。五時には帰るよ」
と早々と答え、谷口は家を出て行った。

待ち合わせ場所の公園では、もう久保と国見が足をパタつかせながら待っていた。
「ごめん。遅くなって」
荒い呼吸を整えながら谷口は言った。
「そんなこと言ってる暇はないぜ」
久保が自転車に乗った。二人も続く。
「行こう！」
谷口は持参した腕時計を見た。二時五十五分を差している。ここ

から本屋まで飛ばして五分。果たして間に合うのか？　あとは祈るしかなかった。

4

ついに本屋が見えてきた。谷口は腕時計を見る。二時五十八分。そして次は本屋に目を向けた。かなりの行列が出来ている。

「とりあえず間に合ったな」

自転車を止め、久保が真っ先に走り出した。

「さて、時刻は二時五十九分。あと一分で、限定週刊少年チャンプが発売されます！」

本屋から一人の女性店員が出てきた。その声と同時に、三人の足の回転が速まる。

「さぁ、ついにあと十秒です。では皆さん、いきますよ。五、四、三、二……」

本屋のドアが開き、一斉に人が流れ込む。三人も本屋の中に入った。だが、ここからが本番だ。前に進もうとするが進めず、後ろからは無理に押される。母たちがやっているバーゲンもきっとこんな感じなんだろうな、と谷口はくだらないことを考えた。

背の高い久保が残りの数を確認する。

「まだ大丈夫だ」

よく聞こえなかったが、谷口は少し安心した。

周りに押されつつも、チャンプは三人の目の前にあった。残り少ない状況で、手の長い久保が一番で取った。谷口も続く。だが、手足が短く、運動もあまり得意ではない国見は、なかなかチャンプを手に取ることができない。チャンプもどんどん減っていく。

そしてついに残り五冊をきった。

「頑張れ和彦！」

二人の応援が届いたのか。国見はチャンプを手に取った。

「よっしゃ！」

そしてチャンプは、最後の手に取られていった。

5

その後三人は、国見の家にあがった。
「ただいま。連れてきたよ」
国見が言うと、奥のほうからバタバタと足音がしてきた。
「あら、早いのね」
国見の母は言いつつ、本を入れた袋を見た。
「よかったじゃない。買えたのね」
微笑みながら言った。
「おじゃまします」
「はい、どうぞ」
三人は国見についていき、二階に上がった。
部屋に入るなり、国見がダッシュで勉強机に向かい、明らかに怪しい行動をとっていた。
「何だ？　何かあんのか？」
久保がやくざ風に問い詰める。
「い、いや……。別に、何でもないよ」
誰から見ても、国見が動揺しているのは明らかだった。
「まあ、いいんじゃない」
何か知られてはまずいものなのだろうと谷口は思った。
「ま、俺らには関係ないか」
と久保も、乱暴に座った。
国見は一息つき、何かを机にしまってから座った。
「よし。じゃあ早速開けるか」
一息ついたところで、久保が袋に手を伸ばした。三人は一斉にチャンプを取り出す。
「おぉ！　かっけぇ！」

久保が本を掲げる。表紙にはアイシールド１８が堂々と描かれていた。
すぐにページをめくる。まずはカードの入っている袋とじを無理矢理破いた。
「おぉー」
キラキラと輝くモンスター。つい見とれる三人。
「いいねー」
と呟く谷口。
「よし。俺アイシールド見ちゃお」
久保は早くもページをパラパラとめくり始めていた。
「あ、お前早くね？」
谷口は言いつつ、久保と同じようにページをめくる。そして部屋は静まり返った。
「はぁー。面白かった」
久保の声で、沈黙が破られた。
「本当本当。いやー、感動したよ」
国見もうんうんと頷く。
「最後の逆転。さすがデモーンだよな」
谷口はボールを投げるふりをした。
「じゃあ、新作読んでみるかな」
しばらく経ってから、国見が言った。
新作の漫画は一番初めの漫画だった。
『タイムスリップ』
題名は青色の文字で書かれていた。
「時は二千八年」
という出だしだった。
「主人公の男性は自殺を考え、ビルの屋上から飛び降りた。だが、地面に衝突する寸前に、意識を失ってしまったのだ。
意識を取り戻したとき、そこは見たこともない所だった。
「あ、あの。大丈夫ですか？」

通行人の女性に声をかけられる主人公。
「あ、ありがとうございます」
主人公は女性の手を借りて体を起こした。
「あのすいません。実は私、２００８年からやって来た、って言うかなんていうか……あの、今は西暦何年でしたっけ？」
女性は変な物を見るような目で主人公を見た後、こう答えた。
「今は――、２０１２年ですけど」
「２０１２年！」
と主人公が叫んだところで、今回は終わりだった。
「なんか、チャンプっぽくない話だよな」
久保が手を首の後ろにまわす。
「でも、いいんじゃない。何ていうか、先が楽しみって感じ？」
谷口も国見に同感だった。次が読みたい、という気持ちが強かった。
「まあ、せっかくカードゲットしたことだし、早速やらないか？」
久保は自分のデッキに付録のカードを入れた。
「望むところだぜ」
その後五時まで、二人は国見の家にいた。

6

「未来……か」
布団に入った谷口は『タイムスリップ』について考えていた。
未来に行くことなんて空想上の話だ。
だが、もし、もしも行けるのだとしたら――、行ってみたい。未来に。あの主人公のように。
その時同時に国見、久保も同じことを考えていたということは、もちろん三人とも知らなかった。そして三人は、深い眠りについた。

夢　5～6（後書き）

次から第二部です。いよいよ

柵　1～2

1　柵

「ん？　今何時だ？」
谷口は目を擦りながら体を起こした。
「うわ！　何だここ！」
そこは真っ白な空間のようだった。見た限りでは先が永遠に続いていそうだ。そして正面には、
「高いなー」
いくら目を凝らしてみても上が見えない柵のようなものがあった。
「おいー、起こすなよ母ちゃん。何の用だよ」
谷口は声のする方向、先程自分がいた真後ろに振り向く。
「久保！」
「え？　谷口？」
二人の目が合い、すぐに谷口が近寄っていく。
「おい、ここはどこなんだよ」
久保が辺りを見回し困惑した表情を浮かべる。
「分かんない」
「谷口？　久保？」
二人はすぐ横を向く。
「国見！」
国見が体を起こしていた。
「国見まで……」
国見はやはり困った表情を浮かべた。
「確か……、寝ようとして」
国見が顎に手を当てていった。
「そう、俺もそうだったような気がする」

「俺もだ」
久保、谷口も続く。
「そしていつの間にか、この意味の分からないところに来ていた、ということか」
国見は眉間に皺を寄せる。
「とりあえず、探索してみないか？」
谷口が提案する。
「そうだな、よし。谷口は後ろのほう。俺が左右。そんで国見があのでっかい柵。ってことでどうだ？」
久保にしてはなかなかなアイデアだった。
「よし、じゃあ何か分かり次第、ということで」
国見の言葉で、三人は一斉に散らばった。

2

谷口は後ろに向かってひたすら歩いていた。もしずっと続いていたら――。
と考えていた谷口は、ごん、と何かに衝突し、尻から倒れた。
「谷口！　大丈夫か？」
遠くからした久保の声に、谷口は起き上がって返事をする。
「うん、何とか。それより久保、気をつけろよ。どこかに壁みたいなものがあって……」
言ってるそばから久保も壁らしきものに衝突した。
「いてー」
おでこを抑える久保。
「よし、これで分かったぞ」
谷口は久保のもとに駆け寄った。
「久保、行くぞ」
「え？　あ、ああ」
久保は谷口の手を借りて体を起こした。そして二人は国見のもと

に走り出した。
「どうだ国見？」
谷口が声をかける。
「うん、大体いいかな。そっちはどう？」
「ああ、大丈夫だ」
谷口が笑みを浮かべる。
「じゃあ、俺からいくぞ。この上下左右に一見永遠に続いていそうな白い空間は、大体八十メートルの間隔がある。それ以上行くと、壁らしきものにぶつかることになる。ってところかな」
谷口が早々と口にした。
「なるほどね。じゃあ、次は僕。ちょっとこっちに来て」
国見が左の方に歩き出した。二人も後を追う。
「これを見て」
そこには0から9までの数字、『年後』、『年前』と書かれたボタンがある機械が置いてあった。
「なんだこりゃ」
国見は久保をなめた目で見ていた。
「例えばこの『1』のボタンを押すとしよう。そしてこの『年後』ボタンを押す」
「『一年後』？」
久保が呟く。
「そう、つまり『一年後』になる」
「――で、何なんだ？」
谷口が言っても、国見は答えない。
「おい」
再び谷口が言うと、
「分からない」
「は？」
「それは分からないんだ」
しばらくの沈黙。

「まあ、とりあえず押してみればいいんじゃん？　『ものはためし』って言うし」
と久保がボタンに手を伸ばした。二人はそれをじっと見ている。
久保はゆっくりと『1』を押し、『年後』ボタンを押した。
その瞬間ピカッと目の前が光ったかと思ったら、三人の意識は飛んでいた。

柵　3〜4

3

「……ん？」
一番に目を覚ましたのは国見だった。
「変わって――、ないな」
辺りを見回して呟く。ひとまず隣で気絶している二人を起こすことにした。
「おい、起きろ」
激しく二人を揺する。
「お……、国見か？」
久保が体を起こし、谷口も目を覚ました。
「ここは？　――って、何も変わってないか」
谷口が頭を掻く。
「いや、よく見ろよ」
久保が柵を指差した。
「ほ、本当だ」
二人は歓喜の声をあげた。
柵は先程まで上が見えないほどだったものが、今は一番上が見える位置まで小さくなっているのだ。
「あの柵っぽいのに、なんかあるみたいだな」
国見が言うと、三人は柵に近寄った。
国見は何回か柵を触ったあと、横棒に手をかけ始めた。
「おい、何するんだよ」
久保が国見の手を掴んだ。
「登ってみないか？」
「でも、何があるのか分からないぞ」
谷口も国見を説得させる。

「『ものはためし』。だろ？」
国見の目は、いつになく輝いていた。

4

二人も渋々柵に手をかけた。左から久保、国見、谷口の順番だ。
三人が並んでも、柵はまだかなり残っている。
そして足をかけ、三人は登り始めた。快調なペースである。あの国見でも、必死になっていた。
早くもてっぺんに近づいて来た三人。
「なあ、いったい着いたらどうするんだよ」
久保が国見を見て言うが、国見は不気味に微笑むだけだった。
運動音痴の国見が、一番に着いた。
「ははは。遅いなー二人とも」
腕を組み、高らかと笑う国見。
「くそ！　なめやがって」
二人も国見のもとに着く。
「さて」
国見が呟いた。二人はいい考えを期待する。
「どうするか」
「は？」
予想外の言葉に困惑する二人。
「考えてなかったんだ。着いたらどうにかなるかなー、って思ってたんだけど」
ここまで来てあてにならない国見に、二人はため息をつく。
三人が考えを凝らしていると、谷口が前方に腕を伸ばした。
「この奥、行ける」
「え？」
「本当ならこの辺にあの壁みたいなものがあるはずなんだ。でもここには、それがないんだ」

「あえて行けるようになってる、ってことか？」
久保の問いに谷口は、
「うん」
と力強く頷いた。
三人は首を縦に振ると、一番上の部分に手をかけ、足を上に持ってきた。そして三人は、柵をまたいだ。
その瞬間、三度目のフラッシュが、三人を襲った。

柵　3～4（後書き）

次から三部目です。いよいよ物語が展開していきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4074d/

柵をまたげば

2010年10月10日22時12分発行